

●代表方剤……良附丸・五積散・当帰四逆湯など。

ただし、裏実寒が発生するのは、元来が胃腸や身体が虚弱なものが多く、素体の虚寒（陽虚）が基礎にあって実寒を呈していることが少なくない。この場合には、補気・補血の薬物に散寒薬を配合して対処すべきである。

●代表方剤……理中湯（人参湯）・附子理中湯・大建中湯・呉茱萸湯など。

2) 虚 寒（陽虚）

陽虚による寒証で、やはり裏寒の範疇に入る（裏虚寒）。陽が衰弱し温煦作用が衰えたために生じる寒証で、「陽虚すれば則ち外寒ゆ」と概括されている。慢性疾患・老衰・先天的な虚弱などにみられる。

〔弁証〕

四肢の冷え・寒がる・顔色があおい・寒冷をきらい温暖を好む・口渇がない・尿が薄くて量が多い・泥状～水様便・疲れやすく横臥したがる・元気がない・動きたがらない・口数が少ない・食欲がない・消化不良・舌は胖大で淡・舌苔は白滑・脈は沈遅で無力などの症候で、寒証と虚証の症候が同時にみられるのが特徴である。

チアノーゼ・冷や汗・無欲状態・四肢が氷のように冷たい・脈が沈微などのショック状態を呈する場合は、「亡陽」という。

〔論治〕

治法は温陽益気で、人参・党参・白朮・黄耆などの補気薬と、滋補強壮作用のある鹿茸・蛤蚧・巴戟天・肉苁蓉などの補陽薬、あるいは附子・肉桂・乾姜などの補陽散寒薬を配合する。寒症状が強い場合は、適宜補陽散寒薬を増量あるいは追加する。

●代表方剤……理中湯・附子理中湯・四逆湯・四逆加人参湯・八味地黄丸・右帰丸など。

亡陽には、附子・人参・乾姜を主とし陽気を強力に補い、ショック状態を改善する。

●代表方剤……参附湯・四逆湯・独参湯など。

以上のように寒証には実寒と虚寒の別がある。概念図を図4-3に示す。陽虚（虚寒）のものは抵抗力が弱く機能の低下があるので寒邪を感受しやすく、逆に、寒邪は機能を障害して陽気を損傷しやすい。このため、臨床上是虚寒と実

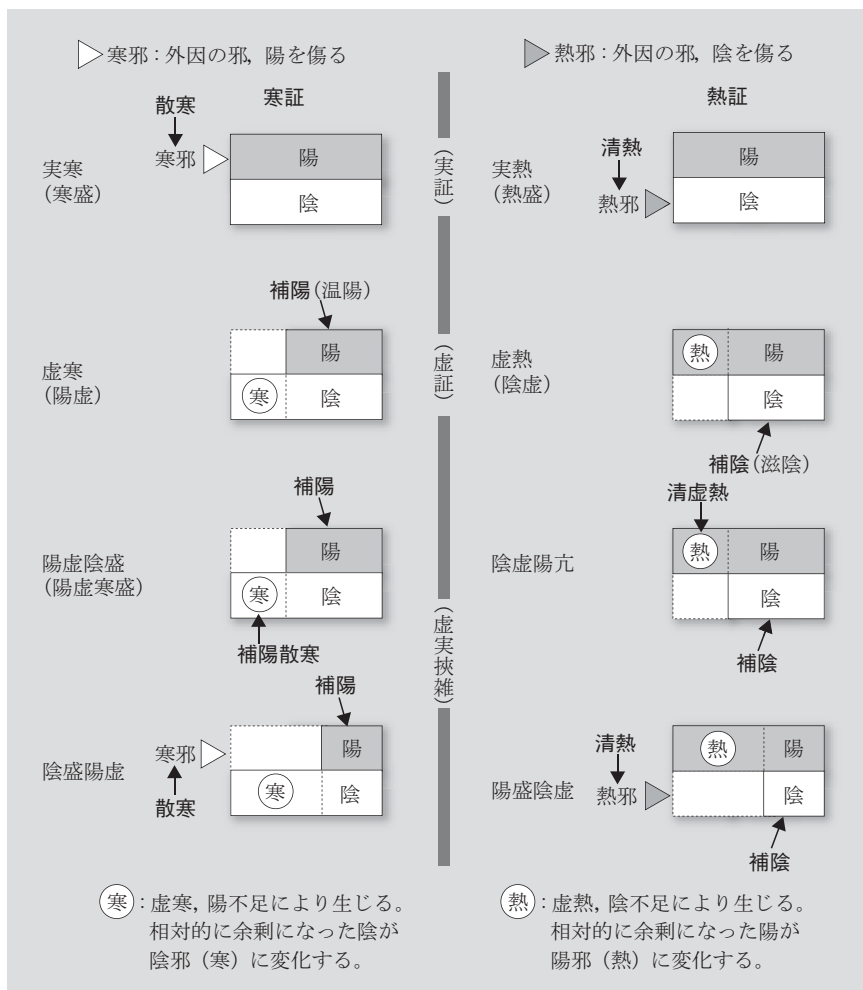


図4-3 寒証・熱証の概念図

寒が混交した虚実挟雑の状況がよくみられる。具体的な処方においても、補陽と散寒の薬物を組み合わせたものが多く、附子・肉桂などは補陽と散寒の効能を兼ね備えているので、いずれの状況に用いてもよい。